

雲仙岳の火山活動解説資料（平成 30 年 6 月）

福岡管区气象台
地域火山監視・警報センター

火山活動に特段の変化はありませんが、2010 年頃から普賢岳から平成新山直下の深さ 1 ~ 2 km を震源とする火山性地震が時々発生していますので、今後の火山活動に留意してください。
噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）の予報事項に変更はありません。

活動概況

- ・噴気など表面現象の状況（図 1、図 2 - ）

白色の噴気が最高で噴気孔上 50m（5 月：200m）まで上がりました。

- ・地震や微動の発生状況（図 2 - 、図 3）

火山性地震の月回数は 18 回（5 月：20 回）と少ない状態で経過しました。このうち震源が求まった火山性地震は 15 回で、震源は主に普賢岳から平成新山直下の深さ約 0 km と深さ 1 ~ 2 km に分布しました。

2010 年頃から普賢岳から平成新山直下の深さ 1 ~ 2 km を震源とする火山性地震が時々発生しています。

火山性微動は 2006 年 11 月以降、観測されていません。

- ・地殻変動の状況（図 4、図 5）

GNSS¹⁾ 連続観測では、火山活動によると考えられる特段の変化は認められませんでした。

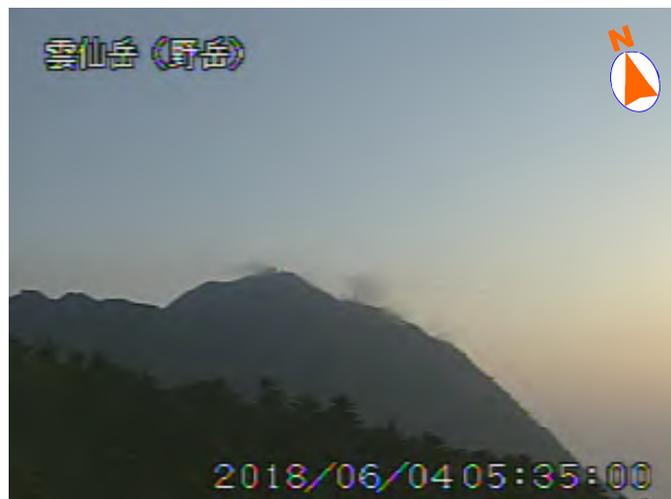


図 1 雲仙岳 平成新山の状況（6 月 4 日、野岳監視カメラによる）

1) GNSS (Global Navigation Satellite Systems) とは、GPSをはじめとする衛星測位システム全般を示す呼称です。

この火山活動解説資料は福岡管区气象台ホームページ（<https://www.jma-net.go.jp/fukuoka/>）や気象庁ホームページ（https://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/STOCK/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php）でも閲覧することができます。次回の火山活動解説資料（平成 30 年 7 月分）は平成 30 年 8 月 8 日に発表する予定です。この資料は気象庁のほか、国土地理院、九州地方整備局雲仙復興事務所（長崎県経由）、九州大学及び国立研究開発法人防災科学技術研究所のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の『数値地図 50mメッシュ（標高）』を使用しています（承認番号：平 29 情使、第 798 号）。

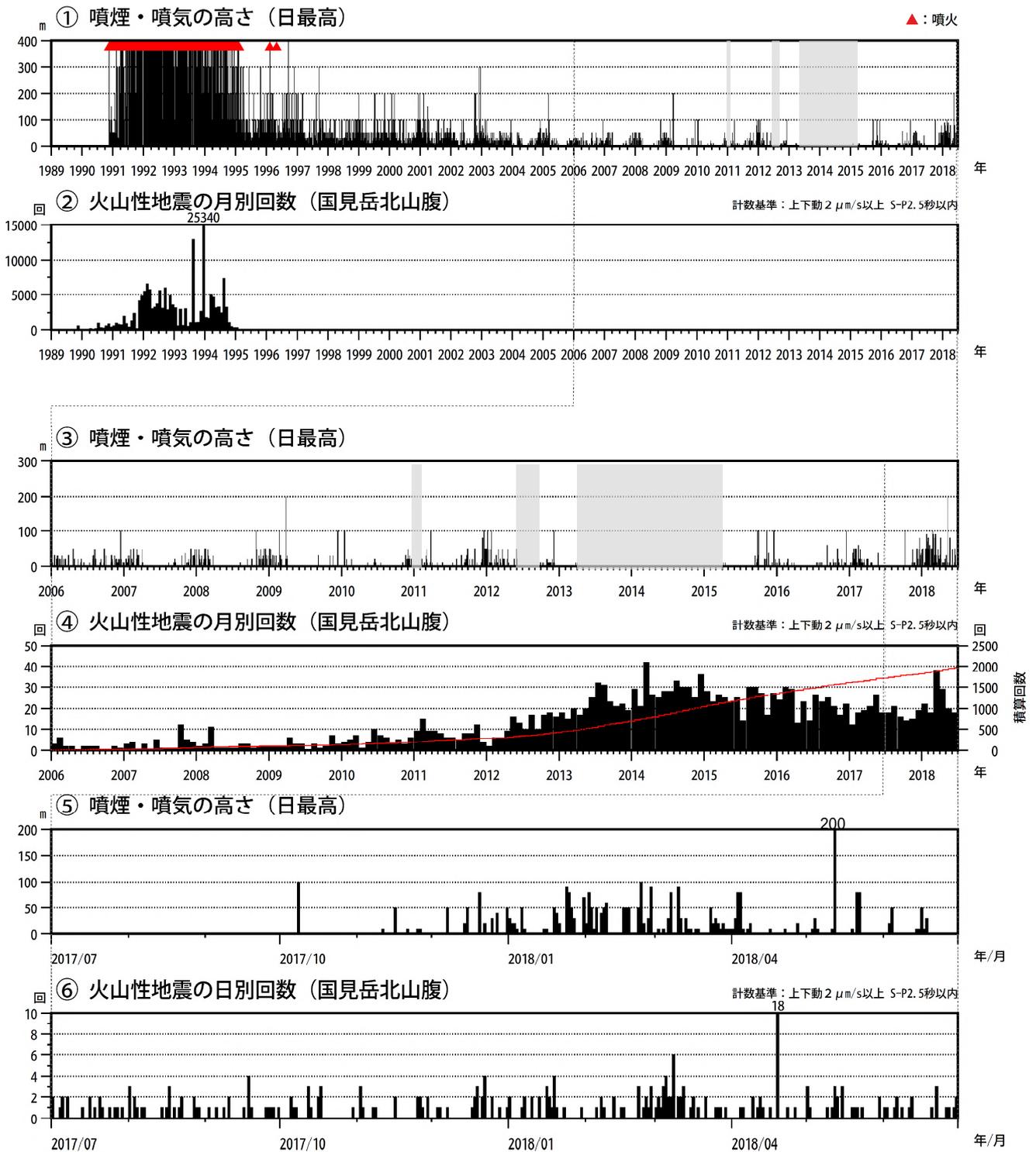


図2 雲仙岳 火山活動経過図（1989年1月～2018年6月）

< 6月の状況 >

- ・ 白色の噴気が最高で噴気孔上 50m（5月：200m）まで上がりました。
- ・ 火山性地震の月回数は 15 回（5月：20 回）と少ない状態で経過しました。
- ・ 長期的には、2010 年頃から普賢岳から平成新山直下の深さ 1～2 km を震源とする火山性地震が時々発生しています。

火山性地震の回数については、2012 年 8 月 31 日までは矢岳南西山腹の計数基準（上下動 5 $\mu\text{m/s}$ 以上）で計数しています。

灰色部分は監視カメラ障害のため欠測を示しています。
の赤線は地震回数の積算を示しています。

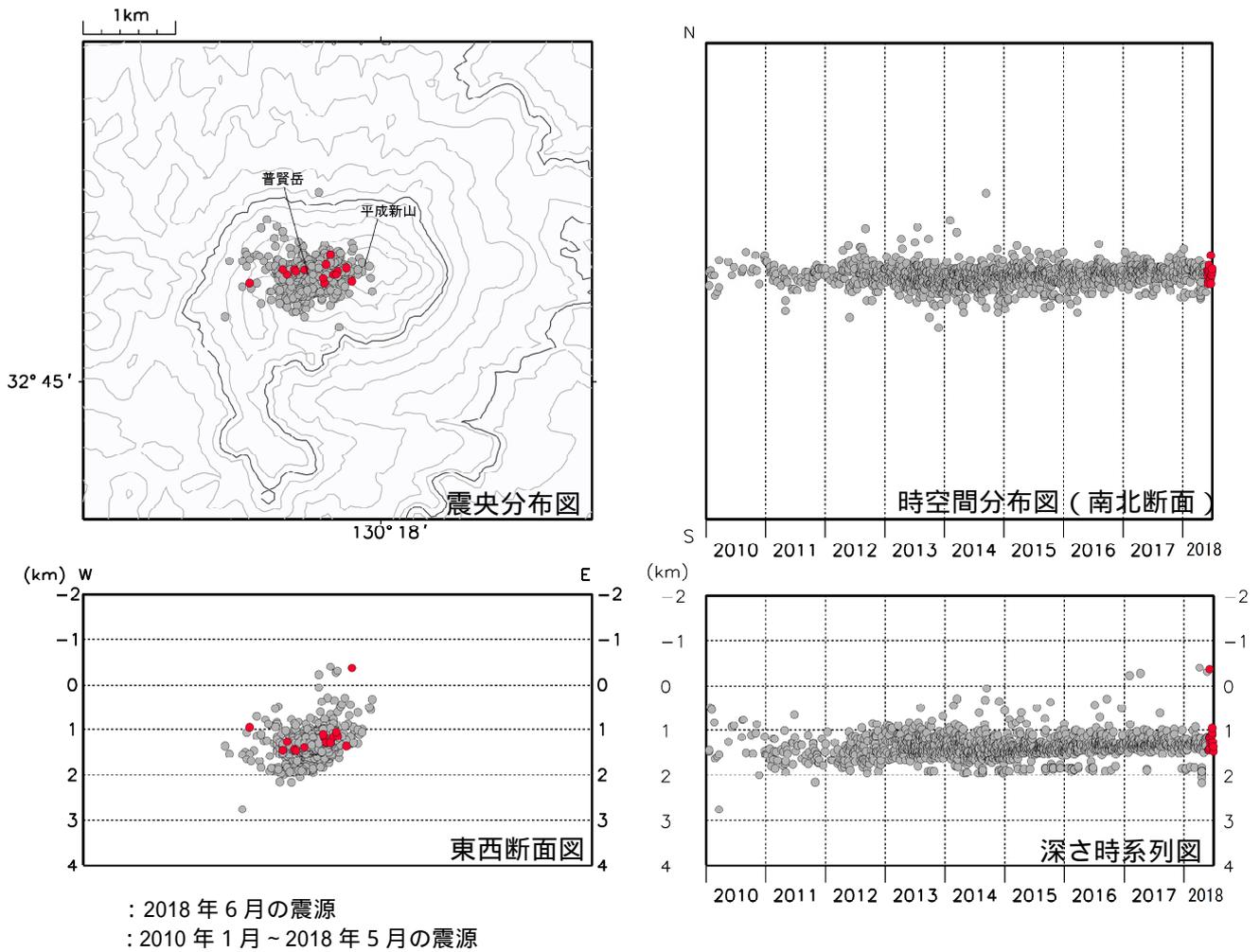


図3-1 雲仙岳 震源分布図(普賢岳・平成新山付近の地震)(2010年1月~2018年6月)

< 6月の状況 >

震源は主に普賢岳から平成新山直下の深さ約0kmと深さ1~2kmに分布しました。

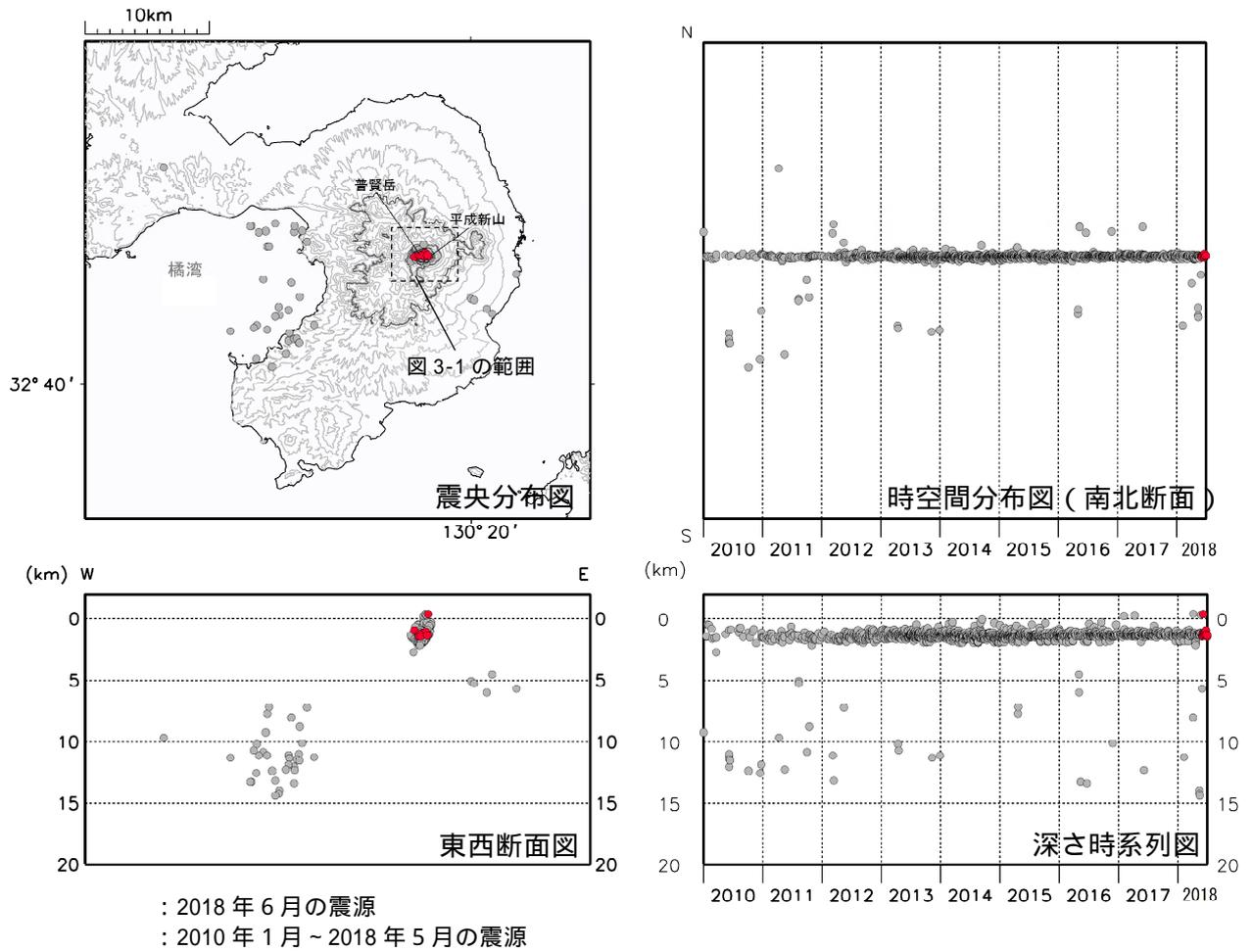


図 3-2 雲仙岳 震源分布図（広域）（2010 年 1 月～2018 年 6 月）

< 6 月の状況 >

震源は主に普賢岳から平成新山直下の深さ約 0 km と深さ 1 ～ 2 km に分布しました。

「平成 28 年（2016 年）熊本地震」

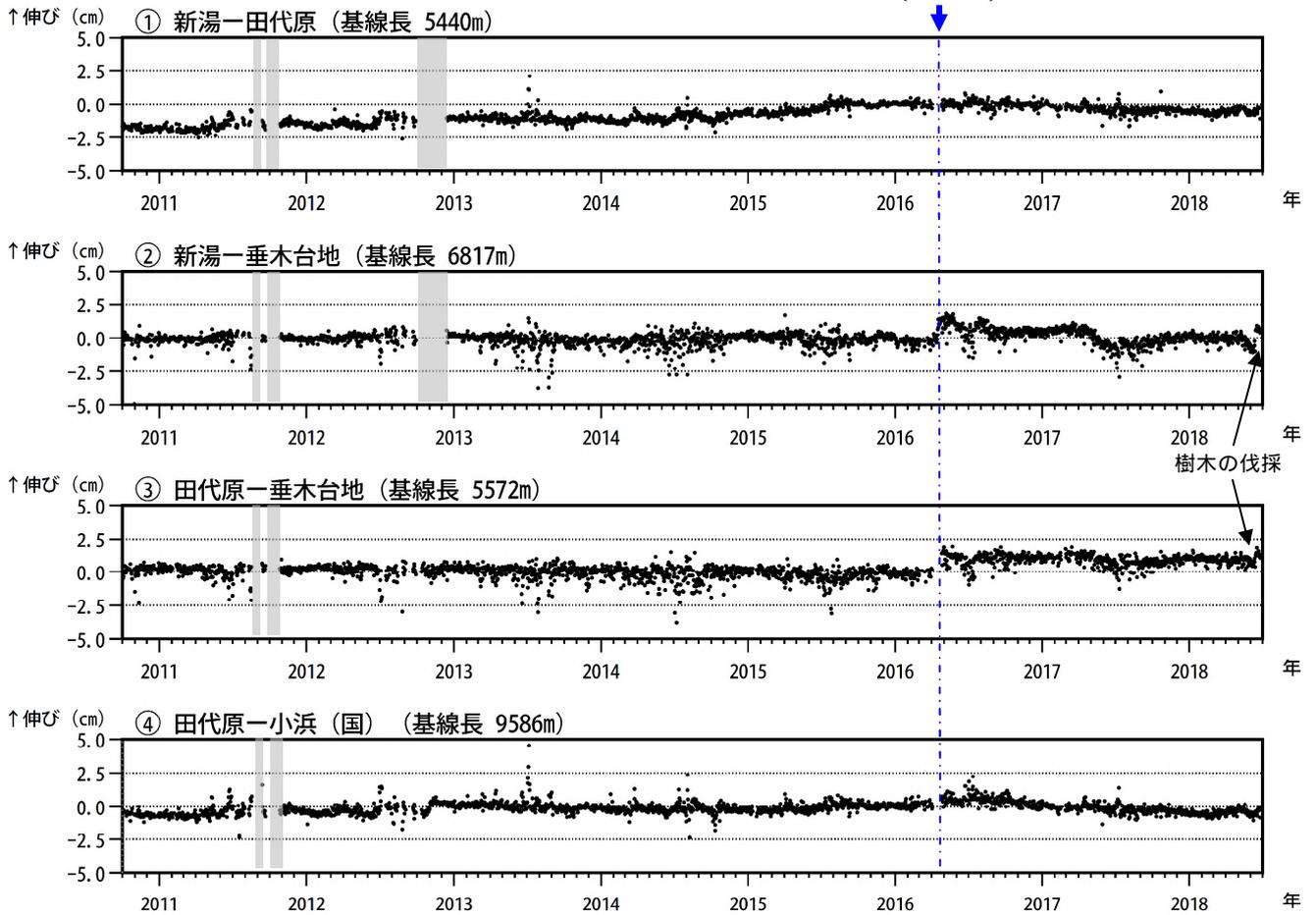


図 4 雲仙岳 GNSS連続観測による基線長変化（2010 年 10 月～2018 年 6 月）

GNSS連続観測では、火山活動によると考えられる特段の変化は認められませんでした。

この基線は図 5 の ~ に対応しています。

灰色部分は機器障害のため欠測を示しています。

2016 年 1 月以降のデータについては、解析方法を変更しています。

（国）：国土地理院

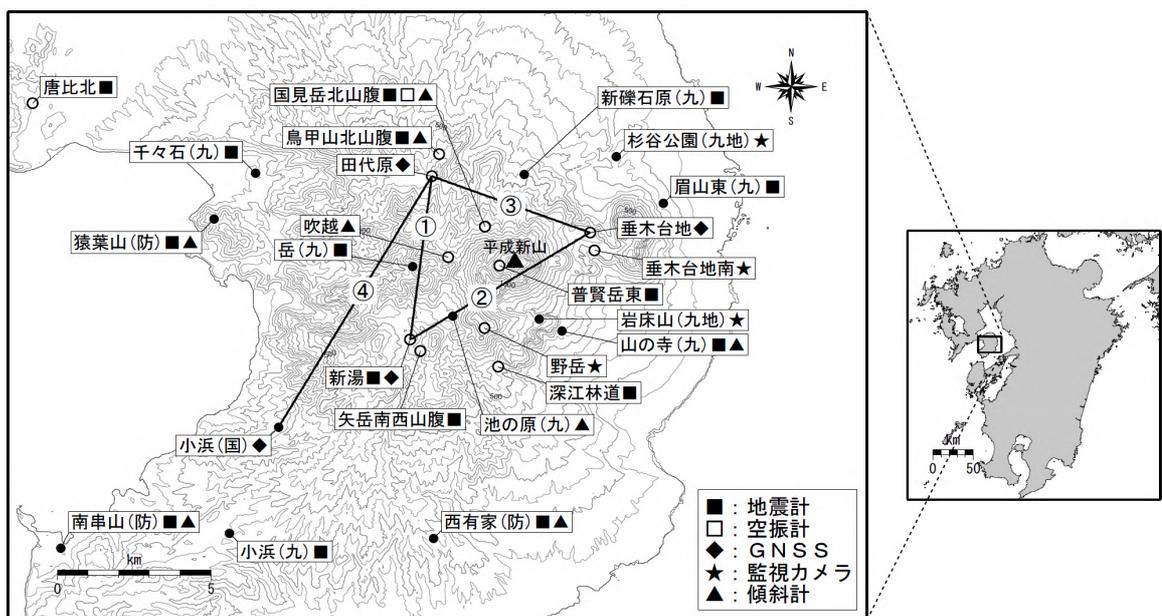


図 5 雲仙岳 観測点配置図

小さな白丸 () は気象庁、小さな黒丸 () は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

（国）：国土地理院、（九地）：九州地方整備局、（九）：九州大学、（防）：防災科学技術研究所